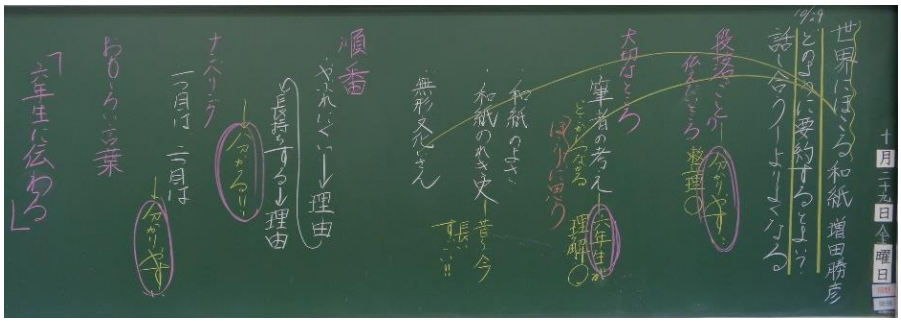
１　授業の実際

児童は、前時に要約する中で「文章中のどの部分を入れるとよいのか」「どれくらいの分量がよいのか」といった要約についての課題をもっていた。そこで、授業の冒頭で、課題をどのように解決していくかと問うと、「互いの要約を読み合いながら話し合う」という意見が出た。理由を尋ねると、「要約を読み合うことで、それぞれの課題の解決法が見えてきたり、更によさを学んだりすることができそうだから」と答えていた。前時において、要約する上での課題が意識されたからこそ、他者と向き合い、解決しようとする姿が見られた。

互いの要約を読み合う中で、「段落ごとに伝えたいところを入れる」「文章の大切なところ（筆者の考え、和紙の歴史、世界文化遺産であること、など）を入れる」「内容の順番を考える」「ナンバリングをする」「分かりやすい言葉に言い換える」「つなぎ言葉を使う」などの要約の仕方を見出していった。だが、それらの要約の仕方のよさについてはあまり語っていなかった。つまり、要約の仕方を見出す際、「内容が伝わること」という言葉の働きに目を向けていながら、十分に自覚できていなかった。（創出）

そこで、全体の場で、見付けた要約の仕方を取り上げ、「そのよさは何かな？」など要約の仕方の意図を問うた。すると、「６年生とって分かりやすくなる。」「６年生が理解しやすくなる。」「６年生がすごいと思えるはず。」といった「内容が伝わること」という言葉の働きに関わる発言が見られた。そして、授業の終末に、「要約するときに大切なことは何だろう」と問うと、「６年生に内容が伝わること」という発言が出て、言葉の働きに着目しながら、要約の仕方を考えていたことを自覚することができた。（受容）



そして、次の時間に何をするかを問うと、「今回見付けた要約の仕方を使って、もう一度要約したい。」という意見に同意が集まり、次の時間に、再度要約をすることとなった。

２　今後に向けて

今回は、「他者に伝える」という目的で要約をしたが、要約には「自分の理解を深める」など様々な目的がある。日常生活の中で、どのような場面で要約が行われているかを分析し、自然な文脈で要約の実践を行うことができるようにしていきたい。自然な文脈であるからこそ、児童の生活に還り、生活をより豊かにする要約の力となると考えるためである。

また、前時において子どもは要約について多様な課題をもっていた。それらを解決するために、より最適な学び方を選択できるようにしていくことで、より豊かな学びが実現できるのではないかと考える。国語科における学び方の選択の在り方についても考えていきたい。